

相談支援係
072-941-3365

ICT教育推進係
072-943-5785

研究研修・幼児教育係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



『そだちのねっこ』

～乳幼児期の遊びより～



【「この人だあれ？」＋（せんせい、いるよね！）】
～『やってみたい！』が学びの芽～

0歳児の様子

8月27日（水）、0歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

自分の体を十分に動かして遊ぶことを楽しめるように、「ランチホール」にいました。机をつなげたトンネルや坂道や、持ち上げることができる大きなサイコロがあり、子どもが自分で選んで遊べる環境でした。しかし、顔見知りでない『私＝知らない人』が入ったことで、「誰や？」と一定の距離を保ってじーっと見て固まってしまう子どももいました。一歩近づこうとすると、「泣くで！」と言わん



ばかりのしかめっ面をし、「これ以上来ないで！」と声なき声を感じました。『私＝知らない人』が視線を外すと、担任の傍へ寄って遊び始めました。坂道をよじ登ぼって滑り、一つの遊び（行動）をしたら担任を見て、温かいまなざしにほっとして、また遊ぼうとする姿が見られました。『私＝知らない人』がいくら温かなまなざしをしても安心感はなく、これまでのかわりを通して、担任の先生が大好きになり安心の場になっていることを目の当たりに感じました。

しばらくして、自分たちの保育室へ戻りました。子どもたちのほっとした表情とともに、好きな玩具を自分で取り出したり、担任から離れて保育室内を探索したりして、ランチホールでの姿とは違った姿を見ることができました。いつもの空間が安心の場所になっていると思いました。そこで、子どもたちと『私＝知らない人』の距離を縮めてみたくなりました。

安心の空間で安心の人（担任）が見える場所が居心地よいスペースでくつろいでいたA児に…。

私：「どうぞ！」と、緑の玩具を置く

A：「・・・」

私：「おんなじ形やね！」と、A児の持っている玩具を指で触る

A：「・・・」ちらっと見る

外部からの刺激を与えてみましたが、『私＝知らない人』を拒否することなく少し存在を気にしながらも、しばらくこのスタイルで過ごしていました。





ねじで動く玩具を走らせて遊んでいた B 児に…。

私：「ちょうだい！」

B：（はい！）玩具を渡す

私：「いくよ～」走らせる

B：止まったら、つかむ

私：「ちょうだい！」

一定の距離があるけど、「ちょうだい」の言葉に渡そうとする姿がありました。繰り返し遊ぶうちに、距離は保ったままでしたが笑顔が見られ、想定通りの遊びに嬉しそうな表情をしていました。

「いないいないばあ～」をしたり、一緒に遊んだりした C 児。私の名札に興味をもち、指差したり、振ったりひっぱったりして、「これなあに？」を知ろうとする姿がありました。

C：名札に付いている鍵を口に入れようとして、私を見る

私：「あかん、あかん」

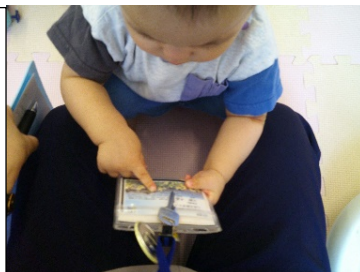
C：「へへへ～」（笑う）

再び、口に入れる寸前で私を見る

私：「あかん、あかんて～」

C：「へへへっ」（笑う）

何回かこのやり取りがありました。私の「あかん」という言葉が否定ではなく、言い方にはまったようで、「もう 1 回！」を求めてきたのだと思いました。



0 歳児では、個人差が大きくありますが、乳児期で大切にしたい愛着（アタッチメント）の経験が基盤となり、子どもは様々な心の力を身につけていきます。「何かあれば、大好きな先生の所へいけばいい」という見通しがもてることで、『私＝知らない人』という初めて見る人に対して「冒険心」が芽生えたと感じています。『私＝知らない人』に対する距離感は一歩ひとりで違っていました。愛着（アタッチメント）を基盤に、勇気をもって一歩踏み出す姿に出会えたことがとても嬉しかったです。この姿こそが、学びの芽（スタート）であると思いました。

愛着（アタッチメント）がしっかりと経験できている子どもほど、探索活動・探究活動に夢中になって、自分の力を広げていくことができますと言います。担任の先生たちの温かいまなざしと「これなあに？」「やってみたい」の気持ちに寄り添った遊び環境を整えたり、見直したりする日々の積み重ねがあり、今回の子どもたちの姿につながっていると思いました。

幼児教育研修＜特別支援教育コーディネーター研修（就学前）②＞

社会性や自我・感情の発達

Q. 何歳でどんなことができるのか？

社会的承認欲求

自他の分離

言葉で気持ちを表す

反対を類推する力



2歳～3歳

「あげる・もらう」の理解

大人の役割が分かる

いつ？どうやって？が分かる・答えられる



3歳～4歳

令和 7 年 8 月 26 日（火）
午後 3 時～午後 5 時に幼児教育研修＜特別支援教育コーディネーター研修（就学前）②＞を八尾水道センター 4 階大会議室で行いました。講師は大阪府立八尾支援学校の 金川 和也 教諭、北野 香 教諭、田崎 榛菜 教諭、白井 遙子 教諭です。研修テーマは「発達障がいのある子どもの理解及び支援の実践」です。

<受講者感想>

- ・社会性や自我、感情の発達のスライドが、0歳から6歳の育つ過程がわかりやすかった。年齢で判断するのではなく、子どもの育っている段階からスモールステップでのかかわりが、子どもにとってはわかりやすく、保育者にとっては「うまくいった」という経験につながると思った。
- ・子どもへの接し方や保護者対応の内容を照らし合わせながら、担任一人だけが一生懸命に向き合うのではなく、園全体で協力していく保育をめざしていきたい。
- ・事例内容は、日頃園で起こっている内容だったので、Aの気持ちが見える支援方法を聞いて、他の子どもたちには約束事を守っていこうという事にとらわれすぎていた保育内容に、もう一度見直しを行っていかうと感じた。

幼児教育研修<キャリアステージ研修②>

子どもの心に寄り添うために

●基本的信頼関係の構築

温かく応答的な関わりとまなざし

自分のことをわかってくれているという感覚

何があっても味方でいてくれるという安心感

●間主観的につながるような視点（一方で客観性の視点も必要）

* 間主観性・・・二者間で何らかの観念や気分を共有する共感性に近い概念

令和7年8月29日（金）午後3時～午後5時に幼児教育研修<キャリアステージ研修②>を八尾水道センター4階大会議室で行いました。講師は大阪総合保育大学 要 正子 准教授で、研修テーマは「乳児保育 子どもの心に寄り添うって？～保育者の役割を知ろう～」です。

←[研修使用資料](#)

<受講者感想>

- ・気持ちを汲み取る時に、たくさんの選択肢を持っておきたいと思った。そのためには自分の感性も磨いていきたい。
- ・基本的信頼関係が成立すると、「子どもが何かを発信すれば良い＝世界を動かす力がある」と思える」という話が印象的だった。
- ・子どもの心に寄り添い、子どもの出しているサインを見逃さず、ちょっとした姿にも「なぜ？」「どうして？」と考え、丁寧に子どもに向き合っていきたい。

通級指導教室担当者会⑥

DCD (発達性協調運動症)ってどんな特性があるの？

DCD? DCD? DCD? DCD? DCD?

身体機能に問題はない
へえ～

DCDは協調運動が苦手な特性のことだよ

特性を理解して上手に付き合っていこう!

舌先を使う
舌先その1

舌先その2

身体を動かす

実は... 30人学級に2～3人

作業療法士など専門家のサポート

便利グッズの積極的活用

身体を動かすのを楽しむ機会を作る

運動の成功体験を積もう

克服を推さずユニバーサルデザインを活用しよう

気持ちよく身体を動かそう

令和7年8月29日（金）午前9時30分～午前11時30分に通級指導教室担当者会⑥を行いました。前半の交流会の司会は八尾市教育センター 佐藤 賢太 主査で、テーマは「保護者・担任・校内連携（ケース会議や校内支援委員会等）で大切にしていることや実践例について」です。後半の講師は関西福祉科学大学 丹葉 寛之 教授で、研修テーマは「発達性協調運動障害のある子どもの学校現場での理解と支援について」です。

←[研修使用資料](#)

<受講者感想>

- ・今回も講義を受ける前に通級担当同士での交流会があり、他校がどのように実施されているかということが分かり、自分のとの違いを知ることができた。良いところや取り入れることが出来そうなところは参考にしたいと思う。今後も横のつながりを大切に、相互に相談しながら実践していきたい。
- ・発達性協調運動障害について具体的に話していただいた。自校の児童についても当てはまることも多くイメージがしやすかった。なわとびや走ることなどの練習方法は参考になり、自校でも周知していきたい。他にも、跳び箱やものさしの練習などの指導方法も調べてみようと思った。
- ・運動の不器用さを改善させるためには発達段階をしっかりと理解しておくことが大切だと改めて感じた。とはいえ、押し付けになることなく子どもの意思を尊重しながら支援しようと思う。また、運動全般について苦手意識をなくすような工夫もしていきたい。

幼児教育研修<子育て支援研修>

令和7年9月3日（水）午後3時～午後5時に幼児教育研修<子育て支援研修>を八尾水道センター4階大会議室で行いました。講師は大阪総合保育大学 丸目 満弓 准教授で、研修テーマは「保護者理解と支援 信頼関係を築く・保護者の自己決定を支える」です。

<受講者感想>

- ・バイスティックの7原則の①個別化では、保護者の悩み相談を受けるにあたり、「みんなも通る道だから大丈夫。悩むのは一人じゃないよ」「いつか終わりがくるよ」と軽はずみに助言しており、まずは保護者の方の話、悩みにどうなりたいかと細かく耳を傾けることが大事だと学んだ。
- ・「経験の積み重ねで原則に沿ったことは無意識にしている。でも知って意識することで専門性が上がる」という言葉が心に刺さった。
- ・専門職として、理論と実践を結び付け、意識しながら保護者を支援していくことの大切さを改めて感じた。

通級指導教室担当者会⑦

作業活動とは？

- ・自分にとって行うべき作業活動が「楽しい」「できた感がある」「自信がある」と、何度もやってみたいと思い、達成感を感じる、ココロが落ち着く、幸せな気分になります。
- ・しかし、自分にとって行うべき作業が「苦手」「苦痛である」「自信がない」と、イライラ感が強まり、もうやりたくない！とココロがざわざわし、自己肯定感が下がります。
- ・自分にとってやるべき作業活動が楽にできるとは「オートマティックにできる」「スムーズにカラダが動き遂行できる」ということです。
- ・「作業が人を健康にする」と言われているように、毎日の生活で繰り返される作業活動を、少しでも楽にできること、楽しんでできることがとても大切です。

令和7年9月5日（金）午前9時30分～午前11時30分に通級指導教室担当者会⑦を行いました。前半の交流会の司会は八尾市教育センター 佐藤 賢太 主査で、テーマは「アセスメントの視点と自立活動（教材の工夫）について」です。後半の講師は関西福祉科学大学 丹葉 寛之 教授で、研修テーマは「発達に課題がある子どもの学校での作業活動の分析と支援について」です。

←研修使用資料

<受講者感想>

- ・始めのアセスメントと自立活動の交流では、粗大運動の大切さやコグトレ棒の実践について知りたいなど同じ班の方と色々話することができて良かった。ただ、教材ありきの活動になら

ないように気を付けていこうと改めて思った。

- ・カラダ作りを考え、体験する場では、少しのことで自分の身体が固まったりほぐれたり、面白い体験をすることができ、不思議に思うと同時にバランスの取り方について学ぶことができた。支援の量についても子どもたちの特性を理解したうえでプロンプトの種類を考え、学校全体で適切な支援を行えるように共有することが大事ではないかと感じた。
- ・丹葉先生の講義では、エリクソンのライフサイクル論での心理的課題や危機についてと、マズローの欲求段階（生理的→安全→所属→承認→自己実現）について、初めて知ることができた。どちらも「なるほど」と納得できた。

幼児教育研修＜特別支援教育・保育研修②＞

こどもへの支援のポイント

◇声をかけは、簡潔に、明瞭に！
曖昧な表現は避ける
肯定的な言い方で！

◇視覚化（絵や写真カード）と構造化がポイント
「はじめ」と「おわり」の明示
自己選択・自己決定を大切に

◇よい（望ましい）行動を増やすことが大切
よい行動の直後に多大に誉める

令和7年9月17日（水）午後3時～午後5時に八尾水道センター4階大会議室で幼児教育研修＜特別支援教育・保育研修②＞を行いました。講師は大阪大谷大学 小田 浩伸 教授で、研修テーマは「一人ひとりが大切にされるインクルーシブ教育・保育とは～共に育ちあうために～」です。

＜受講者感想＞

- ・子どもが安心できる場、失敗しても大丈夫、だれでも認められる、大切にされるという保育を心にずっと留めたい。
- ・合理的配慮が基礎的環境整備に変わり、誰かの

ための配慮がすべての子どもにとっても安心できる環境になることがとても印象的だった。

- ・事前に、どうしたらわかりやすいか、2パターン用意するか、どんな風に説明するとみんなに伝わるか、を考えて準備するだけで、子ども一人ひとりの「できた」「わかった」の自信や達成感につながると思った。

幼児教育研修＜初任ステージ研修②＞

主体的

指示されるのではなく、子どもが自分からやりたい！と感じること
子どもの興味・関心に基づいた活動

対話的

友達と対話をしながら、自分の考えをより良くしていこうとする
子どもの気づきや活動をつないでいく

深い学び

実際にやってみて、なるほど！と思える実感をともなった理解
達成感・充実感

柔軟で応用のきく、本当に身につく力となる

令和7年9月18日（木）午後3時～午後5時に幼児教育研修＜初任ステージ研修②＞を行いました。講師は大阪芸術大学短期大学部教授・社会福祉法人子どものアトリエ城東よつばこども園理事 瀧 薫 さんと、研修テーマは「主体的な遊びが広がる保育環境 ～“やってみよう”と心が動く遊び環境とは～」です。

←研修使用スライド

＜受講者感想＞

- ・子どもの行動の全てには理由があると意識し、困っている子どもの心の声を聴いて、環境づくりをしていきたい。
- ・やってはいけないこと（棚に登る、玩具を投げるなど）をする時、否定するのではなく遊びで代用することの大切さを学んだ。
- ・「イヤイヤ」が多く、どう指導すればいいのか悩んでいたが、それもまた大切な自己確認期であるという事が分かったので、しっかり受け止めていきたいと思った。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は9月から10月に配架した雑誌の誌名と目次の一部と書籍の内容を紹介いたします。

「指導と評価」（日本教育評価研究会）10月号

・特集1 次期指導要領への期待

上智大学 奈須 正裕 教授は「次期学習指導要領は何をめざすのか」と題して寄稿されています。令和6年12月に文部科学大臣から中央教育審議会に対して「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問がなされました。奈須教授はこの中に提起された三つの課題を示されています。一点目は「多様性の公正な包摂」です。多様性の現れとしては、不登校児童生徒、特別支援教育の対象となる児童生徒、外国人児童生徒、特定分野に強い興味や関心を示したり、特異な才能のある児童生徒、性的少数者などが挙げられています。ただ、「特段の問題もなく学校で過ごしているように見える子どもの中にも、大いなる多様性はある。」とした上で、「顕在化している問題の有無だけではなく、一人ひとりの子どもの幸せの実現、そのための発達権・学習権を保障するという観点から、学校のあり方を見直すことが望まれる。」と述べられているのには納得がいきます。これらを実現するためには「正解主義」や「同調圧力」から脱却しなくてはならない、とのこと。

二つ目は「現行の学習指導要領の熟成」です。「画期的」な改革が行われた現行の学習指導要領の内容が引き継がれ熟成されることが望まれるとのこと。「画期的」なところは次の10点です。①「持続可能な社会の創り手となることができるようにする」とするところ。②教育課程政策の進め方に関する新たな方針と具体的な手続きを示したこと。③「社会に開かれた教育課程」という理念を打ち出したこと。④学力論を「内容中心」から「資質・能力」を基盤としたものへと拡張したこと。⑤総則に「教育課程の編成」を新設し、「カリキュラムマネジメント」という概念を提起したこと。⑥「概念」の重要性や知識相互の関連付けなど、知識の質に言及したこと。⑦「主体的・対話的で深い学び」という考え方を確立したこと。⑧子どもの学習過程における意味のあるまとまりとしての「単元」の意義を明記したこと。⑨各教科等の目標に「各教科等の特質に応じた見方・考え方」を示し、中核的な概念や方略を拠り所とした内容の構造化を図るとともに、授業実践における系統性重視への意識を喚起したこと。⑩評価の観点を「資質・能力の三つの柱」と整合させるとともに「評価はコミュニケーション」という考え方を打ち出し、形成的評価を重視する評価観を確認したこと。このように大規模な改革であった上に、コロナ禍の影響などもあり、「道半ば」という状況だそうです。

三点目は、デジタル学習基盤の活用です。今やデジタルは、学校教育のみならず社会全体の在り方を大きく変容させようとしていて、これとどう向き合うかは最大の可能性であるとともに、難問でもあります。

以上のことをまとめると「現行学習指導要領の熟成を基盤に、多様性の公正な包摂とデジタル学習基盤の効果的な活用にしっかり取り組んでいく」というのが諮問文から読み取れる基本方針だそうです。これらを実現するためには「各学校における教育課程編成の柔軟化のための裁量拡大」＝「余白」の創出が不可欠です。さらに、財政的・人的支援と時間的「余白」が必要です。「学習指導要領が子どもの発達を過剰に規定しているとの指摘がある」そうです。ただ、各学校・各教師が「余白」を積極的に有効に活用していくためには、様々な課題があります。これを上手く解決していかないと「余白」だけが残ってしまったり、既存の授業で埋められてしまったりということになりかねません。（葭仲）

・特集2 教師の自己開示・自己理解

巻頭言で学習院大学の 秋田 喜代美 教授は、教師の自己理解を深める契機や転機と題して寄稿されています。人は自分のことが分かっているようで分かっていない。教師も自分のアイデンティティが分かっていない。外的な要因が変化することで、意識することができるということです。具体的には、転機によって違和感をもち、それに適応していくことで、質的変容や自己理解のための転機となります。秋田教授は成功例を紹介されていますが、現実はそのとは限らないと思います。一步間違えば、「郷に入りては郷に従え」さらには「長いものには巻かれろ」になりかねません。多分紙面の関係上自己変容の側面だけを紹介されたものと思いますが、学校教育の変容は相互作用で変容するもので、管理職を含めた全教職員、更には児童生徒・保護者・地域がそれぞれのアイデンティティを翳して作り上げていくものではないでしょうか。
(葭仲)

「道徳教育」（明治図書）10月号

- ・特集 授業でやってみたくてたまらなくなる 「書く活動」

「特別支援教育」（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編集・東洋館出版社）秋号

- ・特集 各教科等におけるデジタル学習基盤の効果的な活用

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）10月号

- ・特集 社会参加する力を育む「社会科」

「初等教育資料」（文部科学省編集・東洋館出版社）10月号

- ・特集Ⅰ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
- ・特集Ⅱ 「社会」問題解決の見通しをもつ活動の重視

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）10月号

- ・特集「高等学校」各教科等を交えて語り合う①～資質・能力の明確化～

教育科学「国語教育」（明治図書）10月号

- ・特集 国語と「探求」の授業デザイン

教育科学「社会科教育」（明治図書）10月号

- ・特集 問いから授業を構想しよう！ 「なぜ」にこだわる歴史授業

「新しい算数研究」（新算数教育研究会編集・東洋館出版社）10月号

- ・特集 学習指導要領の変遷と大臣諮問を紐解き、未来の教育を探る